

深雪と僕のクリスマスイブ

木枯らしが身にしみる季節になりました。ジングルベルが賑やかに鳴り響く夜の街。ジャンパーのポケットに両手を入れながら僕は家路を急いでいました。この暮れはクリスマスに備えてバイト漬けの毎日です。

「兄貴い」

背後から女が声を掛けて来ましたが、自分じゃないと思ったので無視して歩き続けました。

「もう、敬一兄ちゃんったら」

名前を呼ばれて振り返ると深雪がほっぺたを膨らませて走り寄って来ました。僕とは二つ違いの妹で、今年高校三年です。

「何だ、深雪か」

「何だは無いでしょ」

一旦家に戻ったらしく、深雪は白い超ミニのワンピースの上にエンジ色のコートを羽織っていました。足元はコートと同じ色のロングブーツでした。

「兄貴も今帰るところ」

「うん」

「今日はパパもママもいないよ」

「ああ、結婚記念日で出掛けるって言ってたな」

「ディナーショー観て、ホテルに泊まるんだって。結婚記念日って、やっぱエッチするのかなあ」

「馬鹿なこと言うな」

慌てて周りを見回しました。高校生くらいの女の子が二人、ニヤニヤ笑いながらすれ違って行きました。

「へへ、ごめん」

深雪が肩をすくめました。

「そんでさあ、うち帰ってもご飯の用意なんかしてないし、どつかで食べて行かない」

「勿体ないよ。コンビニ弁当じゃ駄目」

「折角二人で食べるんだから、そんなんじゃ詰まらないよ。私がおごるから、ね」

「深雪が」

「うん。兄貴、必死でバイトしてるみたいだから、おごれなんて言わないよ」

「そうか、悪いな」

「何がいい」

「うなぎにしようか」

「えっ、うなぎ。ちよつと予算オーバーかも」

「大丈夫。安くて美味しいとこ知ってるから」

「へえ、どこ」

「新宿の西口。しょんべん横町って知ってるだろ」

「あのゴミゴミした飲屋街でしょ。あんなとこにうなぎ屋なんてあったっけ」

「うん。入り口にね。そこに行こう」

「いいよ。兄貴に任せる」

深雪が嬉しそうに僕の腕を抱えて歩き始めました。僕たちは兄妹の割に顔が似ていないので傍目には恋人同士にしか見えないでしょう。でも僕は照れ臭いのでそっぽを向いていました。

深雪は小柄で高校三年にしては童顔です。それでも胸は大きく、ツンと上を向いたお尻が目を惹くので子供っぽい感じはしません。顔立ちはドキツとするほど可愛いのですれ違う男達が振り返って嫉ましい視線を送って来ました。

「へへ、いい気分」

深雪が鼻歌を歌いながら僕の腕をしっかりと抱き寄せました。

「何がいい気分なんだ」

「だって、みんな羨ましそうに振り返るから。兄貴、格好いいもんね」

「馬鹿、兄妹じゃどうにもならないよ」

「まあね。そう言えば、彼女とは上手く行ってるの」

「それこそ、まあねってとこかな」

「何それ」

「なかなか進展しないんだ」

「ふうん、キスは」

「二、三回」

「エッチは」

「まだ」

「つてことは、イブが勝負だね。そっか、それで必死になってバイトしてるんだ」

「うん」

話しているうちに新宿西口に着きました。

「ねえ、ウナギ屋って、どこ」

「その角曲がって、ちよつと先の左だよ。ほら、そこ」

「へえ、こんなところにウナギ屋があつたんだ」

二人並んでそのウナギ屋に入りました。運良くカウンター席が二つ空いてました。僕が遠慮して安い定食を注文すると深雪が慌てて特上に切り替えました。

「折角だから美味しいの食べようよ」

「ここは安くても美味しいんだよ」

「いいじゃない。ね」

「うん。じゃあ、キモ焼きも二つ」

「キモ焼きかあ。精が付きそうだね」

深雪がおかしそうに笑いました。二人の前にウナギのお重が並ぶと深雪が目を見張りました。

「凄い、ご飯が見えないよ」

さすが特上だけのことはあります。粉山椒をたっぷり振り掛け、一口食べた深雪がニコツと笑いました。

「すっごく美味しい。兄貴、いいところ知ってるんだね」

「だろ」

「時々来ようね」

「うん」

ウナギを堪能した僕たちは京王線の各駅で家路につきました。家は上北沢なので混んでいる特急や通勤快速に乗っても意味が無いんです。駅を出ると深雪がまた腕を組んで来ました。

「おい、手を離せ」

僕は困ったような顔をしてたと思います。

「いいじゃない。近所の人は私たちが兄妹だって知ってるし」

「まあ、そうだけど」

「兄貴はもっと女のこと勉強しないと駄目みたい。そんなにオドオドしてたんじゃ、すぐに振られちゃうよ」

「深雪もそう思うか」

「うん。兄貴、格好いいんだけど、イマイチ冴えないんだよね。」

女の子と付き合ったこと無いんじゃない」

「あることはあるけど……」

「ははあん。もしかして、兄貴って、童貞」

「ば、馬鹿なこと聞くな」

「ふふ、凶星だったりして」

僕は黙ってそっぽを向きました。深雪も黙ってしまいました。

無言のまま二人が家に着きました。

「ねえ、ビール飲む」

玄関に入ったところで深雪が聞きました。

「そうだな。飲もうか」

「私も付き合おうね」

まだ高校生の深雪ですが、家での飲酒は両親も黙認です。缶ビールを二つテーブルに置いた深雪が僕の目を覗き込みながらニツと笑いました。

「何だよ」

照れ臭いので目を逸らせました。

「兄貴、童貞だったんだ。だから彼女ができないんだよね」

「童貞じゃ駄目か」

「駄目って訳じゃないけど、女のこと知らないから押すべきところで尻込みしたり、押しちゃいけないところで突っ張って、結局振られちゃうんだよね」

僕は暫く黙り込んでからコクンと頷きました。深雪の言う通りでした。

「ねえ、彼女、何て名前だっけ」

「圭子」

「その圭子さんと付き合って、何ヶ月」

「もうすぐ一年かな」

圭子と僕は大学の同期です。

「変なこと聞くけど、圭子さんってバージン」

「いや、前に付き合ってた奴と泊まり掛けで旅行に行ったりしてるから、違うだろう」

「そっか」

深雪が困ったなという顔で僕を見ました。

「一年も付き合っけて口説いてないと、ちよつと厳しいかも」

「やっぱり」

「うん。エッチってさ、男が思ってるほど難しいことじゃないんだよ。彼氏とか彼女になつたらするのが当たり前。女の方が誘われるの待ってるんだ。いつまで経っても口説かれなかつたら、女の方が不安になつちゃうよ」

「深雪もか」

「うん。私なら自分から誘うかも」

「深雪はもう経験してるんだ」

「当たり前だよ。もう十八だから淫行条例なんか関係無いもん」

「そっだよな」

深雪が経験済みだと聞いてちよつぴり寂しい気分でした。そんな僕を深雪が悪戯っぽい目で見ました。

「兄貴さえ良ければ、私が教えて上げようか」

「ば、馬鹿なこと言うな」

「冗談でなんか言ってるよ。嫌ならやめるけど」

「別に、嫌だとは言わないけど……」

「エッチってさ、その人の性格がマジ出ちゃうんだ。だから、余裕があるか無いかで全然印象が変わっちゃう。私、兄貴のためだったら何でもするよ」

そこまで一気に喋った深雪がニヤツと笑いました。

「始めるんなら今日からがいいよ。パパもママも帰って来ないんだから」

深雪がコートを脱いで立ち上がりました。

「私、お風呂入るね。もし教えて欲しかったら、来て。嫌だったら、そのまま自分の部屋に行つて」

言葉が浮かんで来ないので、深雪の目をジッと見詰めていました。

「三十分だよ。分かった」

深雪がクルッと後ろを向いて出て行きました。

僕は立つことができませんでした。妹の言う通り、セックスには全く自信がありません。そこに降って湧いたような妹の誘いです。それは僕の心の中に大きな波紋を作ってしまった。

僕は彼女の圭子と妹の深雪を無意識で比べていました。女として見た場合、深雪の方が遙かに魅力的です。顔立ちも比喩もありません。体付きも妹の方が数段上です。その妹が風呂場で、裸で待っています。

(本当にそれでいいのだろうか)

もし深雪が妹でなかったら何も迷わずに風呂場へダッシュしてたことでしょう。でも、深雪が他人だったら口説くチャンスなど絶対に無かったはずです。妹は通っている高校でもダントツの人気ナンバーワンなんです。

僕は自分の気持ちは何度も確かめました。ただセックスがしたいのか。童貞を捨てたいだけなのか。答えはノーでした。

妹に対する淡い気持ちは子供の頃からありました。そんな妹が初体験の相手になってくれたら、そう考えると心の中の鎖が一つ、また一つと外れて行きました。

既に深雪が風呂場に消えて二十五分。タイムリミットまであと五分しかありません。時計を確かめた僕は弾かれたように立ち上がり、慌てて服を脱ぎました。最後のパンツで少しためらいましたが、それも脱ぎ捨てて素っ裸になると急いで脱衣所のドアを開けました。

「深雪、入っていいか」

「うん。待ってるって行ったでしょ。もう来ないかと思ってた」
ドアを開けると深雪が素っ裸で立っていました。服の上から見たよりも胸が大きく、小さな乳首がツンと飛び出しています。下の茂みは殆ど無いに等しく、僅かな産毛だけ。クツキリとした割れ目と、そこからはみ出した唇のような襞が見えました。

「ほら、早く入って」

怖ず怖ずと流し場に入りました。緊張のせいか前は大きくなっています。深雪はそんな僕を横目で見ながら手招きしました。

「さ、座って」

椅子に座ると深雪が頭からシャワーを浴びせ、シャンプーを

振り掛けます。前に回って頭を洗い始めました。目の前で大きな胸が揺れています。下に目を向けるとピツタリ閉じた割れ目が見えました。思わず手を伸ばしたい衝動に駆られました。目をつぶって踏み止まりました。

「兄貴」

頭を擦っている深雪の手が止まりました。

「ん、何」

答えた声がかすれています。

「おっぱいにキスしていいよ」

目を開けるとすぐ目の前に乳首が来ていました。あと数センチで触れてしまおう距離です。

「何でもしていいよ。でも、唇にだけはキスしないで」

「えっ、何で」

「何でも。他はどこにキスしてもいいから」

「うん」

そっと顔を前に出すと唇が乳首に触れました。

「ん」

深雪が声を上げました。唇で挟み、舌の先で転がすとホーッとため息が出ます。

「こっちも」

深雪が僕の頭を振ってもう一方の乳首も含ませました。

頭を洗い終わると深雪は僕を立たせ、腕から肩、胸へと手の

ひらで擦り始めました。擦るたびに前が揺れます。

「兄貴、大きいね」

深雪が笑いました。

「そうか、大きいか」

ちよつとだけ嬉しくなりました。

「でも、剥けてないね」

「う、うん」

思わず俯いてしまいました。

「だと思った」

「何で」

「兄貴、もうすぐ二十歳でしょ。その歳まで童貞だと大概包茎なんだ。それで自信が無いんですよ」

「う、うん」

「だから、深雪が教えて上げようと思ったの」

深雪は僕の身体を擦り続けました。

「そこはもうちよつと待つてね」

深雪は揺れている所を避けて尻から腿、膝へと手を進めて行きます。つま先まで洗い終えらるともう一度両手に石けんを塗り付けました。

「洗うよ」

深雪が固くなりかけたものを握りました。

「剥くよ」

「うっ」

思わず呻いてしまいました。石けんの滑りで先っぽがしつかり剥けました。

「うん、戻らないね。いつも剥けてるくせ付けないと駄目だよ」
深雪が石けんの泡を剥けた先端に擦り付けます。こびり付いていた汚れが少しずつきれいになって行きました。妹の手の感触は信じられないくらいに気持ちいいものでした。

「出しちゃってもいいからね」

初めて自分以外の、それも妹の手で擦られて前が何度もはねてしまいました。

「元気だね。昨日はオナニ、した」

「いや、一昨日」

「じゃあ、溜まってるね」

「うん」

それでも目一杯我慢しました。

「じゃあ、ベッドに行こうか」

僕の身体をシャワーで流し、深雪がバスタオルで拭いてくれました。自分は待っている間に洗ってしまったようです。

「兄貴の部屋にしようか」

僕は首を横に振りました。折角だから深雪の部屋で初めての体験を迎えたかったんです。

「いや、深雪の部屋がいい」

「私の部屋か……」

深雪が少し考えてからニコツと笑いました。

「いいよ。いこ」

深雪のベッドはシングルで狭いんです。並んで横になるのは無理なので、僕が上になりました。思わずキスしようとするので、深雪が顔を背けたので、唇が頬に当たりました。

「キスは駄目だって言ったでしょ」

深雪が僕の手を取って胸の上に置きました。

「優しく触って」

「うん。こんな感じでいい」

「それじゃくすぐりたいよ。もうちよつとしっかり」

「こう」

「いいよ。うん、そんな感じ」

「乳首も触っていい」

「うん。摘んで、コリコリして」

「固くなって来た」

「うん。気持ちいいと乳首も立つんだよ」

胸に触りながら、僕はチラチラと下に視線を送っていました。

「見たいの」

深雪がおかしそうに笑いました。

「うん」

「いいよ、見ても」

考えてみたら電気は点いたままです。深雪の身体が隅々まで輝いて見えました。

「ねえ、電気って消さなくていいの」

深雪の足元に回りながら聞きました。

「相手がバージンだったら消した方がいいかも。経験済みなら明るい方がいいよ」

「何で」

「女ってき、経験するまでは凄く恥ずかしいの。でも、膜が無くなっちゃうと平気になるんだ。それに、見られるのって好きな子が多いし」

「そっか、それで深雪もしっかり見せてくれてるんだ」

「そうだよ。でも、そんなこと言わないで」

「何で」

深雪が一瞬口をつぐみました。

「別に……」

深雪がそっぽを向いて脚を広げました。自分がバージンじゃないことを気にしているのかも知れません。

「見て」

ほんの少しだけ産毛をまとった割れ目が開き、ピンクの襞が濡れていました。

「きれいだ」

「触ってもいいよ」

深雪が指先で割れ目を更に広げました。

「ど、どこに触ればいいの」

「どこでも。でも、優しくね。あ、お尻の穴は駄目だよ」

「やっぱり駄目なんだ」

「慣れるまではね。さ、遠慮無く触って」

「うん」

指で触れた感想は、とにかく柔らかいというものでした。指先でそーっと押ししても、どこまでもめり込んでしまふんです。

はみ出した唇を両手で目一杯広げたら深雪に頭をひっぱたかれました。

「やりすぎ。チョー恥ずかしいよ」

「痛かった」

「ううん、痛くはないけど」

僕はもう入れたくてウズウズしていました。

「ねえ、入れてもいい」

「いいよ。濡れてるでしょ」

「濡れてるって、ここ」

割れ目の中を指先でなぞりました。

「うん」

「ヌルヌルになってる」

「じゃあ、自分で入れて」

このまま入れていいものかどうか、心配になりました。

「ねえ、ゴム付けなくて平気」

深雪がクスツと笑いました。

「大丈夫。そのままでもいいよ。兄貴だってその方がいいでしょ」
「う、うん」

深雪が脚を大きく広げたのでその間に腰を入れました。先っぽにヌルツとした感触が当たりました。剥けたばかりで敏感だったのですが、ヌルヌルのお陰で気になりません。

「もうちよつと下。もうちよつと。うん、そこ」

先っぽは案外簡単に入りました。でも、その後が上手く行きません。焦っていると深雪が膝を持ち上げてくれました。

「もうちよつと下から上に押して。うん、入って行くのが分かるでしょ」

深雪の言う通り、少しずつ入り込んで行きます。それにしても、思っていた以上のきつさに驚きました。

「兄貴、大っきい……」

深雪が眉間にしわを寄せていました。

「痛いか」

「ちよつと。もう少しゆっくり入れて」

「うん」

僕は深雪が大っきいといった言葉を信用していませんでした。温泉の大浴場で見比べた限りでは特別小さい訳ではないけれど、人並み外れて大きいとはとても思えなかったからです。

妹の言葉もお世辞半分だと思いました。深雪は僕が意気消沈しないよう気を遣ってくれてるんだと思いました。

ようやく全部が収まり、お腹とお腹がくっつきました。先っぽに何かが当たっています。

「入ったみたい」

深雪の耳元で囁くと何度も頷きました。

「動いてもいい」

「うん。でも、ゆっくりね。兄貴、すごくきついから」

「分かった。痛かったら言って」

よく二擦り半と言うけれど、十回くらい出し入れしたら先っぽが痺れて来ました。深雪が濡れて来たので滑りは良くなったんですが、入れた時よりもきつくなったような気がします。お陰ですぐに我慢できなくなりました。

「だ、出してもいい」

切れ切れに聞きました。深雪は目をつぶったまま何度も頷きました。

「出る……」

「お兄ちゃん」

思い切り弾けながら、僕はハツとしました。深雪は冗談のようにセックスを教えると言っていますが、元々そんな脳天気な妹ではないんです。

その妹が最後の瞬間に僕のことをお兄ちゃんと呼びました。

少し照れが入った兄貴という呼び方からお兄ちゃんに変わった瞬間でした。幼い頃からの深雪の姿が次から次へと浮かんで来ました。

「どうだった」

ようやく目を開けた深雪がニツと笑いながら聞きました。

「うん、すごく気持ち良かった」

「私も」

深雪が可愛くて唇にキスしようと思いました、間に手を入れられてしまいました。

「キスは駄目って言ったでしょ。お風呂に入ったらクンニして」

「クンニって、口でする奴」

「うん、慣れとかないと駄目だよ。女の子は大概されるのが好きだから」

「はい。よろしくお願いします」

「馬鹿」

深雪は笑いながら半分怒ったような顔をしました。僕がおどけたのが気に入らないようでした。

風呂に入ると深雪はシャワーを何度も当てて僕の滴を洗い流しました。

「ほら、もう平気だよ」

浴槽の縁に腰掛けて脚を開きます。僕は足元に膝を付いて割れ目の中を覗きました。さっき見た時よりもポツテリと膨らん

で、ピンク色が濃くなったような気がしました。

「舐めて」

深雪が僕の頭を引き寄せました。

「どこ舐めたらいい」

「クリ」

「クリって、どこ」

「ここ」

深雪が襷の合わせ目を指先で広げました。周りより白っぽい米粒くらいの塊が見えました。

「指じゃ触らないで。舌の先でそっと舐めて」

言われた通りに尖らせた舌の先でそっと舐めました。

「あん」

深雪のお尻がピクンと震えました。本当に気持ちいいみたいです。続けて何回か舐め、最後に唇で挟んで吸い上げると深雪が大きな声を上げました。

「いい、それ、いい。もつと……」

僕は訳も分からず感動していました。妹の一番大事なところに口を付けているんです。それも妹にせがまれて。エッチは勿論気持ちいいのですが、口での愛撫はそれ以上に僕を興奮させました。

クリから唇を離して入り口を吸いました。こちらもさつきとは違って何となく周りが分厚いような感触でした。もうちよっ

と下にお尻の穴が見えました。そこも舐めてみたかったです
が、焦らず待つことにしました。慣れて来たら許してくれるよ
うな気がしました。

シャワーが終わると深雪が壁に両手を突いてお尻を僕に向け
ました。説明なんか要りません。お尻の間から全てが見えてい
ます。後ろから近付くと深雪が手を伸ばして握りしめ、導いて
くれました。先っぽがニユルツとはまり、次の瞬間、思い切り
絞められました。

「凄い……：：：気持ち良すぎ」

思わずお尻を突き出してしまいました。

「私も」

深雪は背が低いので膝を曲げないと位置が合いません。それ
でもしっかりと貫いたところで持ち上げるように尻を抱えると深
雪が喘ぎました。

「ちょ、ちよつと。それ、やばい」

「ん、痛い」

「ううん、痛いんじゃないかって、感じ過ぎちゃう」

「じゃあ、もっと突いてもいい」

「うん、ガンガン突いて」

二回目なのに、あつという間に気持ち良くなりました。僕の
強張った先端が深雪の全体重を支えている感じなんです。深雪
の前に手を回しておっぱいを包むように揉みました。

「これで大丈夫」

「う、うん。それでいいよ」

深雪が上の空で答えました。エッチを教えてくれると言っていた割にはうぶな感じです。それでも深雪の反応を見ながら触る場所や腰の動かし方を色々試してみました。

その日は親が帰って来なかったので夜中の二時過ぎまで、五時間以上深雪と抱き合って過ごしました。深雪はエッチよりもグダグダ抱き合って甘える方が好きそうでした。僕もそんな妹が可愛くて、思いつ切り抱きしめてしまいました。

ハッと目を覚ますと深雪が僕の顔を覗き込んでいました。

「眠れた」

「うん」

「もう一度、する」

言われて気が付いたんですが、僕はまだ深雪の中でした。

「うん。したい」

「いいよ。好きだけして」

深雪が上になってお尻を回し始めました。でも、思ったほど気持ち良くないんです。仕方なく僕が下から深雪を突き上げました。

「あ、それ、いい」

どっちが教えてるのか分からないような感じでした。

パパとママは昼過ぎに戻って来ました。ママの顔を見たら昨

日とは別人のように輝いてました。

「ね」

深雪がウインクしました。しつかりエツチして来た顔でしょ、
と言ってるみたいです。でも、その深雪本人がもつと怪しい雰
囲気を漂わせていました。だって、たった三十分前まで僕は深
雪の中にいたんです。ママがそんな深雪の顔を覗き込んでニツ
と笑いました。

その晩、パパとママは十時前に寝室に消えました。またエツ
チするのかと思ったら、それぞれ自分の部屋に入ったきり出て
来ません。昨日頑張りすぎて爆睡したみたいです。

僕もちよつと眠かったんですが、寝る前にもう一度したかつ
たので深雪の部屋に行きました。パパとママがいるから嫌がる
と思ったら、すんなり裸になってくれました。

二日目ということもあり、僕は思ったより落ち着いていまし
た。相変わらずキスはさせてくれないので乳首をしゃぶり、指
でクリをこね、割れ目に舌を差し込みました。試しにチラッと
お尻の穴にも舌を押し付けてみました。

「うーん、駄目え」

深雪はお尻を振って抵抗しましたが、本気で嫌がっているよ
うには見えませんでした。僕が上になって一つになると深雪は
昨日よりもきついような気がしました。

「ん、ん、気持ちいい、気持ちいいよう」

もう僕に教えているような雰囲気は皆無でした。むしろ深雪自身が僕とのエッチを楽しんでいるように見えました。その晩も僕は深雪の中で果て、そのまま抱き合って眠りました。

「お兄ちゃん、起きて。シャワー使って」

深雪に揺すられて目が覚めました。時計を見ると六時です。あと三十分でママが起きて来ます。本当はもう一度したかったです。でも、それも言ってもらえません。ゆっくり深雪から離れると二人の匂いが強烈に漂いました。

「ね、シャワー浴びないとやばいよ」

まず僕がシャワーを使って自分の部屋に戻りました。代わって深雪が風呂場に入るとママが起きて来ました。僕の匂いが残っていないかヒヤヒヤしましたが、ママは何も言わなかったの。でホッとしました。

それから一週間。パパもママもいる家で僕と深雪はこつそりエッチを続けました。僕の方もあつという間に慣れました。エッチって深雪の言う通り大げさなものじゃないと実感しました。

一番大事なのは相手のことが本当に好きかどうかだと思います。お互いに心を込めてエッチすればどんどん気持ち良くなつて来ます。そこで気になったのはこの一週間の深雪の変わり様でした。

僕が割れ目を口に含み、舌の先でクリを転がすと深雪は夕オ

ルを食いしばって声を堪えています。グリグリと舌を動かすと入り口から暖かい流れが溢れてお尻を伝ってシーツを濡らします。思い切って指を差し込むと尻を突き上げました。

「お兄ちゃん、いい、何か変……」

深雪が嫌々をしました。

「あ、駄目、ああ……」

深雪の入り口がヒクツヒクツと収縮しました。人差し指一本がきつい位です。

「お兄ちゃん、好き、お兄ちゃん、好き……」

僕はそれが深雪の本音だと確信しました。その瞬間、僕の中で何かが変わりました。そうです。これまで誤魔化してきた妹への気持ちを素直に認める決心が付いたのです。二人の間でセックスが恋愛に変わった瞬間でした。

深雪は処女ではなかったんですが、自分が言うほどのヤリマンでは無いことがすぐに分かりました。

「深雪」

顔を上げて妹の顔を見ました。真っ赤に上気した深雪はこれまでに見たことが無いくらいに可愛く見えました。

「何」

「一緒にしてくれないかな」

「一緒について、お口でするの」

「うん、してくれたら嬉しい。嫌だったら諦めるけど」

「嫌って訳じゃないけど、きつと下手くそだよ」

「何で」

「正直言っちゃらね。まだしたこと、無いんだ」

「嘘」

「ほんと」

「じゃあ、無理だね」

深雪は暫く返事をしませんでした。僕が諦めて正面から抱こうとすると深雪が両手で止めました。

「いいよ。やってみる。お兄ちゃんなら汚いなんて思わないから。でも一緒じゃなく、私にさせて」

深雪は僕を仰向けにして足元から顔を寄せて来ました。

「駄目だったら言っただけ」

深雪はチロチロと舌を出して先端を舐めました。妹に舐められてと思うと気持ち良さが三倍にも四倍にもなってしまう。深雪は唇をすぼめて先端を含みましたが、怖々なので殆ど刺激がありません。気持ちの上ではドキドキするんですが、このままではいつまで経ってもいけないと思いました。

「もうちょっと唇をすぼめて」

初めて僕が深雪に頼みました。深雪は何度も頷き、唇を絞めました。ゆっくりと腰を持ち上げ、上あごの裏に先端が当たるようにしました。

「深雪、いい。続けて」

ようやく深雪が顔を上下に動かしました。そうすると上あごに先端が擦れてとつても気持ちいいんです。

「べロも動かして」

深雪は言われた通りに舌で裏側の割れたところをチロチロと擦りました。偶然舌の先がツボにはまり、あつという間に気持ち良さがこみ上げて来ました。

「いく、いくよ」

慌てた深雪がタオルを探りましたが、手が届きませんでした。それでも、深雪は口の動きを止めませんでした。

「ゴメン、いく……」

凄いい勢いでした。深雪は口を離すまいと目を白黒させています。ほっぺたを膨らませ、時々喉が鳴りました。

「あー」

口を離れた深雪が大きく息を吐きました。その息に乗って僕の匂いが漂って来ました。

「セイシって苦いんだね」

「ごめん」

「ううん、何か嬉しかった」

深雪が照れたように唇に残った滴を舐めました。

暫く休んで僕が回復したので、深雪が上になって僕を導きました。

「きついね」

深雪が照れたように眩きました。確かに深雪の入り口がすぼまっただけには入りません。ようやく先端が入ってもそこで止まってしまった。

「何か今日のお兄ちゃん、凄く大っきい」

「ううん、深雪がきつくなっただよ」

「嘘」

「ほんとだよ。いった後の深雪は指一本でもきついんだから」

「そうなんだ」

「嫌なこと聞いていい」

「何」

「おまえ、何人とやったんだ」

「お兄ちゃんの前ってこと」

「うん」

「一人だよ。それも、三回しかしてない」

「いつ」

「中学一年の時」

「何だ、五年も前じゃないか」

「うん」

「その時も今みたいに気持ち良かった」

「ううん、全然。お兄ちゃんとするようになって、エッチが好きになっちゃった」

「そうか」

僕はそれ以上喋らずに深雪に没頭しました。ゆったりとした抜き差しを続けながら親指の腹でクリを揉み続けます。

「あ、お兄ちゃん、駄目……いっちゃう……あ、あ……」
ビクッ、ビクッと深雪が僕を締め付けました。僕も限界でした。

「深雪、いくぞ」

「お兄ちゃん」

さつき口に出したばかりなのに、これでもかというほどたくさん出ました。

「ねえ、中に出しちゃったけど、大丈夫」

恐る恐る聞きました。暫く喘いでいた深雪が目を開き、ジロツと僕を睨みました。

「さあ、危ないかも」

「おいおい」

慌てる僕を深雪がキュッキュツと絞めました。

「嘘。ピョーン。ピル飲んでるから大丈夫だよ」

「脅かすなよ」

ホッと胸を撫で下ろすと深雪が脇腹をつねりました。

「でもさあ、大丈夫かどうか確かめもしないで、中に出すもんじゃないよ」

「分かってる。ごめん」

「もし出来ちゃったら、どうする気だったの」

「勿論、責任取るさ」

「どういう責任」

「結婚できなくても、一緒に暮らして、子供を育てて……」

「本気でそんなこと言ってるの」

「勿論本気だよ」

「ふうん」

その途端、僕はギクツとしました。僕には圭子という彼女がいるし、その圭子とクリスマスに結ばれようとしているからです。

「本当に好きなのは深雪かも」

深雪が一瞬目をつぶりました。

「駄目だよ、そんなこと言っちゃ」

「ううん、やっぱり僕は深雪が好きだ」

「駄目。兄妹なんだよ」

「それでも深雪が好きだ」

「うーん、困ったね」

実は、僕には深雪に対する後ろめたさが全く無いんです。深雪と愛し合うようになって圭子とは殆ど連絡を取らなくなりました。プライドの高い圭子は意地になって僕を無視していました。が、とうとう痺れを切らして僕に詰め寄って来ました。

「ねえ、もう十日も連絡くれないけど、どういふ積もり」

「いや、ここんどこバイトが忙しくて」

「バイトと私、どっちが大事なの」

「比べるなんて無理だよ。休まずに出てくれってお店から言われてるんで、ずっと働きっぱなし。毎日真っ直ぐ家に帰ってるし」

嘘はありません。圭子は友達を通じて色々探りを入れたようですが、事実だからボロの出ようが無いし、僕と深雪の関係など知る由も無いんです。

結局、圭子との仲はその三日後に終わりました。圭子から一方的なメールが来て、それきりになりました。僕の方から一切フォローしなかったのが直接の原因です。

毎日深雪を抱いている僕としては当然のことでした。むしろ、深雪が何のためらいも無く僕に毎日抱かれてるのが意外でした。

僕は圭子と一緒に過ごすために予約しておいたイブのホテルはそのままにして前払いを済ませました。駄目元で深雪を誘う積もりなんです。予定通り真珠のペンダントも買いました。これでバイト代が粗方飛んでしまいました。

深雪は律儀に毎晩僕を受け入れました。生理の時もです。一番きつい日は幸いにも両親が揃って出掛けたので風呂場で何度も抱き合いました。

深雪は抱き合うたびにどんどん感じるようになり、クンニの最中に突然失禁してしまいました。慌てて吸い付き、飛び散る

飛沫を受け止め、全てを飲み干しました。後でどうなったか聞かれ、そのまま説明すると深雪は顔を真っ赤にしてオロオロしました。

「お兄ちゃん、ごめんね」

「いいって。深雪のおしっこならいつでも飲んでやるよ」

「やだ、恥ずかしいよ」

でも、そのことが僕たちを更に強く結び付けたような気がします。

クリスマスイブが二日後に迫った晩、深雪がそれまで通り僕を自分の部屋に誘いました。

「今日で最後にしようね」

僕は買っておいた真珠のペンダントを持って行きました。

「これ、貰ってくれ」

「何、これ」

深雪が箱を開け、ペンダントを見て目を丸くしました。

「クリスマスプレゼントだよ」

「えっ、これって、圭子さんに上げるんでしょ」

「いや。これを買う前に圭子とは別れた」

「嘘」

「ほんと。これは深雪のために買ったんだ。圭子のを回したんじゃないよ」

深雪は暫くペンダントを見詰めていました。その目からスー

ツと涙がこぼれました。

「嬉しいけど、こんなの貰えないよ」

「貰ってくれ。それと、明後日の晩はホテルの予約が取ってあるんだ。前払いも済ませている。予約は圭子と過ごす積もりで大分前に取ったんだけど、前払いしたのは別れた後だよ。一緒に過ごしてくれないか」

深雪が僕の間を見詰め、唇を噛んでいました。次の瞬間、両目から大粒の涙がこぼれ、抱き付いて来ました。

「駄目だって……」

「深雪は僕のこと、嫌い」

「馬鹿。嫌いだったらエッチなんかしないよ」

「じゃあ、イブと一緒に過ごしてくれる」

「待って。イブは明後日でしょ。それまで考えさせて」

ここで強引に押しちゃいけないと思いました。

「分かった。よく考えて」

僕が自分の部屋に戻ろうとすると深雪が抱き付いて来ました。

「駄目、一緒に寝て」

「それじゃ考えられないだろう」

「いいの。こんな時に一人じゃ堪えられないから」

結局その晩も次の晩も深雪は僕に抱かれて寝ました。でも、エッチはしませんでした。その代わり、寝る前に深雪がしっか

りと唇を押し付けて来ました。僕が怖ず怖ず舌を伸ばすと深雪がすっかり受け止めてくれました。深雪は来てくれる、そう確信しました。

いよいよイブというその日、僕は昼過ぎに家を出てホテルに向かいました。三時にチェックインを済ませ、ダイナーの予約も確認しました。深雪は来てくれると信じてましたが、内心不安で一杯でした。

適当に時間をつぶし、予約の七時が迫ったのでホテルのレストランに向かいました。案内されたテーブルには四人分のナプキンとグラスが用意されていました。変だなと首を傾げていると深雪が歩いて来ました。立ち上がって迎えようとする、その後ろからパ。パとママが続きました。

「えっ、何で」

思わず三人の顔を見比べてしまいました。これから僕と深雪が約束の夜を過ごす、その場に両親が来るなど想像もできなかったからです。

「心配しないで」

ママがそう言ってみんなを席に着かせました。

「まず、乾杯が先ね」

ママがそう言っているとパ。パがボーイを呼んでシャンパンを注文しました。ボンと栓が抜かれ、琥珀色のシャンパンがシュワーツとグラスに注がれました。

「敬一と深雪、二人の幸せを願って、乾杯」

ママの音頭でみんながグラスを合わせました。

「えっ、僕と、深雪の、幸せ……」

僕はシャンパンを半分だけ飲み込んでからママの顔を見ました。

「そうよ。敬一も深雪も、覚悟を決めて来たんでしょ」

「まあ、そうだけど」

ママもパパも、どこまで僕たちのことを知っているのか、気になって仕方ありませんでした。だって、兄妹が身も心も捧げて愛し合い、一緒に生きて行こうと言うんですから、それを親が無条件で認めてくれるなんて絶対に無い話です。

「じゃあ、家で……してたのも知ってたんだ」

エッチの部分を口パクにしました。

「勿論知ってたわよ。深雪は大きな声出すし。ま、お陰で私も大満足なんだけどね」

ママがパパにウィンクしました。

「まあな」

パパが照れたように頭を掻きました。どうやら僕たちに刺激されてパパとママも毎晩エッチしてたみたいです。

「話の続きはお部屋でね」

ママがそつと釘を刺しました。確かにこれ以上話しを続けたら飛んでもないことを喋りそうです。

食事が終わるとパパとママも僕たちの部屋に来ました。二人とも別の部屋を予約してあるそうです。

ベッドに腰掛けたママが僕たちにも座るように手で合図しました。僕がママの隣に座ると深雪が僕の膝を枕に寝ころびました。

「まさか、あんた達がこうなっちゃうとはねえ」

ママはそう言いながら深雪の頭を撫でました。僕はこれ以上とぼけても仕方ないと覚悟を決めました。

「ねえ、ママも、パパも、怒ってないの」

「怒るって、何を」

ママが真っ直ぐに僕の目を見ました。

「僕と深雪のこと」

「怒ってるって言ったら止められるの。って言うか、あんたの深雪に対する想いって、その程度だったの」

正直言つて脳天ハンマーでした。

「深雪はそんな柔やわな子じゃないわよ」

ママが深雪のほっぺたを両手で挟み、顔を近付けて唇にキスしました。

「確かに兄妹でって言うのは褒められた話じゃないし、他人ひとには言えないわね。それでも深雪のことは諦められないんでしょ」

「うん」

「一つだけ言っておくわね。あんた達のこととは一つ残らず深雪

から話を聞いているの。今日はお口でして貰ったとか、初めてフエラしたとか

「えっ、嘘」

深雪が僕の顔を見上げてベロを出しました。

「ごめん。ママの言う通りなの」

「全部って、何もかも」

「うん。私が教える振りするためにもママが必要だったんだ」

「教える振りって」

「本当は私もお兄ちゃんが初めてだったの」

「嘘、血なんか出なかったじゃない」

僕は頭が混乱して何も考えられませんでした。するとママが僕の頭をそっと撫でました。

「深雪はね、小学校の時に同級生の女の子達から可愛すぎるって妬まれて、モップの柄を突っ込まれちゃったの。そう、女の子からのレイプよ。すぐ私に言えばいいのに、やせ我慢して黙ってたから何度もやられて、身体はバージンじゃなくなったのよ」

そう言えば中学に上がる前、深雪は殆ど引き籠もりのような時期がありました。

「えっ、そんなことがあったの。僕に言ってくればやっつけてやったのに」

深雪とママがクスツと笑いました。

「駄目だよ。お兄ちゃんは真面目すぎるからやり過ぎて、反対に訴えられちゃうよ。増して相手は女だよ」

「そうそう。敬一には無理ね。だから、二十歳にもなって深雪に何もかも教えて貰ってるんでしょ」

「まだ十九だよ」

「あと半月ね」

ママが笑いながら振り返ってパパを見ました。

「その辺はパパ譲りかも」

「えっ、俺か」

急に話を振られたのでパパが目を白黒させました。

「そうよ。パパはママが口説けなくて悶々としてたの。仕方ないからママが温泉に行こうって誘って上げたのよ」

「ほんと、誰かさんそっくり」

深雪がおかしそうに笑いました。

「ねえ、まだ肝心なこと聞いてないよ」

僕はママに食い下がりました。

「僕たちって、間違いなく兄妹だよね」

「そうよ。二人とも貰いっ子なんかじゃないわ」

「それでも許してくれるの」

「仕方ないでしょ。深雪があんたを選んじやっただから」

「どういうこと」

「さっきも言ったけど、深雪は女の子にレイプされて引き籠も

りになったでしょ」

「うん」

「引き籠もりの原因はレイプそのものじゃないの。レイプした女の子たちがそれを言いふらして、深雪がいじめに遭ったからなの。ね、深雪」

「うん。あいつももうバーজনじゃないから平気でやらせるだろうって話が広まって、男の子たちが言い寄って来たの。って言うか、無理矢理やろうとしたの。必死で逃げたんだよ」

深雪が僕の手を握りました。

「そんな時、お兄ちゃんがいてくれたんで凄く心強かったんだ。男の子でも、お兄ちゃんみたいな優しい人もいるって分かったから学校にも戻れたんだよ」

考えてみたら高校生になった頃から深雪は僕にまわりつくようになりました。僕の大学受験の時は我慢してたみたいですが、それでも夜食やコーヒーを持って来てくれたり、いつも僕のことを気に掛けてくれました。

「私はね、そんな深雪をずっと見て来たの」

ママがもう一度深雪のほっぺたを撫でました。

「自分の娘が誰に恋してるのか、母親だから痛いほど分かるのよ」

ママが深雪のほっぺたに当てた手を肩から腕の方に移動しました。

「ま、詳しいことは深雪に聞きなさい。それと、パパとママは従兄妹同士だって知ってたよね。昔からいそこ同士は鴨の味って言うの。血が近いせいでセックスが濃厚になっちゃうんだって。増してあんた達は兄妹でしょ。凄くないじゃない」

「う、うん」

思わず深雪と顔を見合わせてしまいました。

「もうお話はいいでしょ」

ママが立ち上がってパパの手を引きました。

「パパもママも何にも言わないから、二人でしっかり考えなさい。あなた達のことは信用してるから、深雪が大学を出たら将来のことを決めなさい」

「うん、ママ、ありがとう」

深雪がママの手を握りしめました。

「深雪は忘れずにピル飲むのよ。子供のことはそうそう簡単じゃないんだから」

「はい、分かってます」

深雪が起き上がって神妙に答えました。

パパとママが出て行くと深雪が抱き付いて何度もキスしました。

「へへ、黙っててごめんね」

「ううん。それより、圭子と別れて大正解だね」

「当然よ。そのためにお兄ちゃんを誘惑したんだもん。正直焦

つてたんだよ。お兄ちゃんと圭子さんがエッチしちやったら、もう割り込めないから」

「深雪に迫られたら圭子なんて目じゃないよ」

「ほんとに」

深雪が上目遣いに僕を見て横っ腹を突っつきました。

「ねえ、一つだけ聞いていい」

さっきの話では深雪も僕が初めてだと言ってたんですが、一つだけ腑に落ちないことがあったんです。

「何」

「最初の晩、僕が包茎だって剥いてくれたけど、深雪も初めてなのに、何でそんなことが分かったの」

「へへ、ママに聞いたの。ママ、お兄ちゃんが包茎だって知ってて、上手に剥いて上げなさいって」

「ふうん、ママが教えたのか」

話している間に深雪が立ち上がって裸になりました。深雪の身体は惚れ惚れするくらい素敵です。僕も慌てて服を脱ぎました。

「素敵なイブでしょ」

深雪が僕を抱き締め、唇を重ねて来ました。

「そう言えば、何で最初はキスさせてくれなかったの」

唇を離して聞きました。

「お兄ちゃんが深雪のことを本当に好きになってくれるまで我

慢したの」

「僕が深雪のことを本当に好きだって、いつ分かった」

「へへ、恥ずかしいよ」

「言えよ」

「んー」

深雪が顔を真っ赤にしました。

「あのさ……」

「だから、いつ」

「お兄ちゃんがおしっこ飲んでくれた時」

「そうか、あの時か」

僕は思いつ切り深雪を抱き締めました。

「おしっこじゃないけど、深雪だって何も言わずに僕のを飲んでくれただろう。それで、ああ深雪の気持ちは半端じゃないなって思ったよ」

「うん。好きじゃない人のなんか飲めないよ」

深雪をベッドに寝かせ、膝を割って口を付けました。

「今日もおしっこ飲んで上げようか」

「馬鹿」

真っ赤になって照れる深雪が本当に可愛く見えました。